

中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか

周 星

中国の一民俗学者の立場から見ると、隣国日本の民俗学には基本的に二つの大きな伝統があると思われる。一つは柳田国男の伝統、もう一つは洪沢敬三の伝統である。両者を比較すると、柳田国男の民俗学は「心意現象」、「民俗語彙」及び口承史料の重視と日本「固有」文化への固執等を特徴としている。一方、洪沢敬三の民俗学は物質文化、民具・民間技術、産業史、絵画史料の研究等を特徴とし、日本の民俗学において「民具学」の学派を形成した。両者の共通性はいずれも民衆の歴史と生活文化の研究を重んじたことであり、近代化の大きな流れの中で日本の民族伝統文化研究の必要性を意識したことである。

国により民俗学はそれぞれ独自の学問の発展過程をたどり、異なる特徴を形成しているため、互いの長所や短所について安易に比較・評価はできないが、国際的学術交流が日増しに盛んになってきた今日、中国民俗学の物質文化研究は隣国日本の民具学から多くの重要なことを学ぶべきであり、また学ぶものがあるだろう。私の印象から言えば、中国民俗学は相対的に物質文化研究の学術的伝統に依然乏しく、様々な形式の民俗誌の中で、物質文化について言及が全くないか或いは極めてわずかである。特に日常生活の中の各種器具について専門的に記述したものは大変少なく、専門の「民具誌」はほとんど見られない。従って、中国民俗学には日本の「民具学」に類した専門の学術分野はまだ形成されていないと言えるだろう¹。

中国民俗学史において早くも1920年代に、一部の人によって「風俗に関する器物の収集」と「風俗博物館」²設立の重要性が指摘され、各地の新年の風俗に関わる物品の収集が行われている。しかし、民俗学はその後の発展過程で口承文芸研究を主とする流れが次第に形成され、物資文化に関わる民俗学研究の多くは「民間伝統工芸」と「民間美術」等の分野³に集中し、物（厳密には「民芸品」であり「民具」ではない）の美や芸術的価値に重きが置かれ、日常生活の中の地味でありふれた物やそれと関連のある民間技術や庶民の生活の知恵などはほとんど見過ごされてきた。

中国の学術的概念の中で、日本の学界で言う「民具」に近いのはおそらく「民俗文物」であろう。しかし、「民俗文物」は本来「文物」という言葉（日本の「有形文化財」に類似）から派生した一連の概念（「革命文物」、「歴史文物」、「民族文物」、「出土文物」等）の一つであり、その学術的背景は主として考古学と博物館学であって民俗学ではない。

「文物」という言葉は、中国の古書にかなり早い時期から見られ、その大意は礼楽典章制度と関係ある器物である。『後漢書・南匈奴伝』にある「制衣裳、備文物（衣裳を作り、文物を備える）」という意味である。つまり「文物」とは、もともと主に上流階級や支配階級と密接に関連がある器物を指すのであり、民間の生活の中のありふれた物を意味するわけではない。宋代に「金石学」が起こると、「古物」、「古董」、「古玩」、「古器物」等の用語が生まれたが、これらも基本的に一般庶民の実生活とは無縁である。20世紀に入ると、「文物」という言葉が広く用いられるようになり、内容も絶えず敷衍されたが、基本的には依然「歴史」における物質文化の遺跡や遺物を意味していた。1993年に出版された『中国大百科全書・文物博物館巻』で初めて「民俗文物」の定義がなされ、「民間の風俗、習慣等の民俗現象を反映した遺跡や遺物」であるとされた。その範囲は大変広く、衣食住・交通、生産、信仰、祭事などを含む全ての社会生活とそれに関連した社会的関係に

及ぶだけでなく、さらに上部構造である各種制度やイデオロギーも反映している。民俗文物は、異なる風俗の代表的実物として、ある民族或いはその民族のある地域における風俗文化の発展と変化⁴を人々に理解させるものである。この定義は幅広いが、依然として文物の「遺跡と遺物」という属性が強調されすぎており、実際の生活で今なお使用されている様々な実物についてはほとんど含まれていない。現行の《中華人民共和国文物保護法》には、「民俗文物」に対する明確な規範が依然として定められていない。このことから、「民俗文物」が中国の考古学と博物学において未だ辺縁の位置にあることが分かる。

日本の「民具」という言葉は主として、食品や薬品を除く、民間で伝承され生活文化の中で人々によって創られ使用される具体的で移動可能な様々な人工物を指す。言うまでもなく、それは器物の「歴史」と「美的価値」がまったくと言っていいほど強調されておらず、これが中国の民族・民俗「文物」と異なる点である。中国には次のような見解がある。それは、民間美術品と民間工芸美術品を民俗文物の重要な構成要素であると思ふことができ、それらの外在形式、例えば造型様式と精選された材料、材質及び精緻な製作工程など民俗文物の美的傾向を代表できるということである。

各種の民間美術品と民間工芸美術品だけでなく、中国は一般「民具」の宝庫でもある。中国人の日常生活において、造型、素材、材質、用途の異なる様々な器物がそれぞれ独自の用途を有している。一見ありふれて見えるこれらの器物は、その造型の伝承、製作の技巧、使用の方法などいずれもが民衆の生活の知恵を体現しており、中国民俗文化の重要な構成要素であることは疑いもない。しかし近年、高度経済成長がもたらす国民生活の急激な変化によって、庶民の日常生活で普通に見られた道具や器が工業製品（金属やプラスチック製品）に急速に替わりつつある。民具や民俗品が大規模に流失し廃棄される状況は一部の学者に危機感を抱かせ、学界で再び「民俗文物」の概念に関する議論が集中的に行われた。

最近中国社会に注目すべき三つの動向が現われている。第一に、全国的に各種の「民俗博物館」が次々に設立され⁵、各地の文物、古物或いは骨董市場において個人コレクターによる「民俗物品」の収集ブーム⁶が起きつつあることである。これは一般民具の価値が徐々に見直されていることを意味すると同時に、民具の流失がすでに危機的状況にあることを示している。第二に、南方の少なからぬ経済先進地域では、地方政府と地元知識人が地方文化の持つ潜在力の発掘や古い町や村を巡る観光ツアーを推進する過程で、地域文化のアイデンティティーを持つ各種民俗文物、民俗物品や民具が観光客のノスタルジックな感情に訴えるため、重要な文化資源として益々利用されていることである。こうした事例は非常に多く、典型例としては例えば常熟沙家浜景勝地の「江南水郷古農具用具館」、蘇州用直古鎮の「農具博物館」、浙江烏鎮の「伝統工房区」や「伝統民具区」などがある。第三に、民俗学界においても「民具」という言葉が徐々に流行し始め、「民俗文物」、「民俗物品」等の概念と同じように使われていることである。特に喜ばしいのは、近年中国でも学術的意義のある民具研究の成果が続々と発表されていることである。例えば、宋兆麟教授の「民族文物」と「民俗文物」の研究⁷、尹紹亭教授らの雲南物質文化と各種生産工具の研究⁸、徐芸乙教授の民間用品・工具と中国「造物」伝統に関する研究、金熙氏の江南水郷農漁具の研究⁹、方李莉教授の景德鎮「民窯」の研究¹⁰、葉大兵氏らの「履物」文化の研究¹¹などがある。この他にも、伝統農具、食器、茶器、玩具、服飾など特定の物質文化に関わる多くの研究成果¹²が発表されている。

特筆すべきは、宋兆麟教授が編集主幹を務め、中国民俗学会民族民俗博物館専門委員会が編纂した『中国民族民俗文物辞典』¹³である。これは中国における現在の物質文化と民俗文物に関する研究水準と最新の成果を示した辞典で、8,175項目の民族民俗文物用語と3,733点余りの挿絵と写真を収録している。これは現時

点における中国民具研究の「集大成」と言えるもので、今後さらに研究を深めていく時の重要な基礎になることは間違いないであろう。強調すべきことは、伝統的「文物」のカテゴリーを越え、少数民族の物質文化と漢族の「民俗文物」に注目し、特に近現代の一般庶民の日常生活用具（又は「民具」）を重視する面で、この辞典が大変大きな貢献をしていることである。

しかし、日本で出版されている何冊かの民具辞典¹⁴と比較すると、『中国民族民俗文物辞典』には明らかに以下の様な問題が存在する。

- ・民具に関する用語の多くに地域と年代背景に関する明確な説明が付されていない。
- ・用語のうち一部の「呼称」（できる限り現地社会の呼称や現地の民俗用語を使用すべきである）については、更なる校訂と考証が必要である。
- ・写真や図画をそれなりに使用し、用語の説明をしているが（一部の少数民族の民具については図画や写真が不足している）、基本的に測量データや寸法が供されていないため、挿絵の精確さに欠ける。
- ・全体的に製作方法や使用方法に関する説明が不足している。
- ・用語に詳細な参考文献が付されていない。
- ・実地調査が不十分なため、資料に少なからぬ遺漏がある。例えば漢族の「家庭用具」の項については、不足が顕著である。

異なる国の学術的文脈の中で編纂された辞書を安易に対比することは、必ずしも適切とは言えないが、上述の簡単な説明に基づき、日本民具学の研究成果を参考にして、中国民俗学の物質文化研究において現時点で重視されるべきいくつかの問題を指摘したい。

第一に、中国民俗学界は物質文化研究、特に民具研究における価値とその重要性について十分に認識すべきだということである。民俗学界は、口承文芸或いは民間文学こそが中心課題であるという偏見を捨てるべきであろう。既存の「民間工芸」、「民間美術」、「民俗文物」の研究を基礎にして、「民間器具」、「民間手工技術」、「民具」に類する概念、研究視角、問題意識をさらに強化する必要がある。各種の民間物質文化事象或いは実物の「歴史」、「科学」、「芸術」及びいわゆる「経済」的価値を認めると同時に、これらのありふれた民具が有する「庶民の知恵」と「日常生活」の価値に対する認識をさらに強めるべきである。当然、その中にはこれら民具や実物に賦与されている或いはそれに結びついたシンボル、感情及び民俗的記憶（例えば身体的記憶）なども含めるべきである。長期に亘り、中国民俗学には庶民の生活文化全体（民間文学或いは口頭伝統だけでなく）を研究対象にしようとする学術傾向が常に存在する。筆者から見て、この学術的目標達成のカギは、民俗学が庶民生活の物質的基礎に関わる民具研究を受容或いは統合できるかどうか、さらにはそれを如何に行うかにかかっている。

第二に、中国民俗学は物質文化と民具の実地調査を積極的に行い、調査の結果を基に多くの民具誌と民具図録資料集を編纂すると共に、様々な地域、民族、テーマの民具の実物或いはそれらを組合わせた物を収集し体系的に整理すべきである。特に代表的な民具或いはそれらを組合わせた物を、日本政府が指定する「重要民族資料」或いは「重要有形民俗文化財」と同じ様に、中央政府或いは地方政府の文物及び文化遺産保護リストに加えるべきである。民具のフィールド調査方法、民具の収集・分類整理・実測等資料を体系化する技術、民具の保存・管理・展示及び当時の社会における利用と再生産の方法¹⁵、民具研究の資料論等多くの事項について、我々は日本の民具研究から学ぶことができる。今、特に強調すべきことは民俗学のフィールド調査において、民具或いは物質文化の視点と項目を増やし、民俗誌の中に民具誌或いは物質文化の章を設

けることである。

第三に、近年中国、日本、韓国、ベトナム、モンゴルなどを含めた東アジアの「比較民俗学」が大きく発展していることである。歴史的に、人、技術、器物等を含めた文化交流がかつて非常に盛んであった東アジアにおいて、比較民俗学を志向する国際的学术交流を展開することは大変意義深いことである。しかし、これまで比較民俗学の多くは民間文学と民間信仰等の専門領域に集中しており、民俗文物と民具に関する異文化比較研究については、一層の強化の余地が残されている。日本の学者がかつて「比較民具学」という構想¹⁶を提唱し、中国物質文化に関する一部特定テーマの研究以外に¹⁷、ある具体的な民具（例えば唐箕、犁など）の東アジアにおける比較の面で、有益な試みを行った。長期的には、中国の民俗学者は東アジア民俗学の国際交流に参画するに当たり、物質文化或いは民具の比較研究も徐々に視野に入れていくべきである。そして、中国の学者は日本や韓国の学者の民具研究の成果、物資文化研究の理論と方法を謙虚に真剣に学ぶ一方、最終的に確実で信頼できる学術成果を基礎に世界の民俗学界との交流や対話ができるよう、国内民具の实地調査と資料の蓄積の面でより一層の努力を傾けるべきであろう。

民俗文物や民具はかなりの「同時代性」を有しており、庶民の生活文化を物質的に体現するものであるが、より重要なことは実生活の中で依然人々にそれぞれの方法で利用され続けていることである。従って、民具によって中国人の「造物」文化の伝統をある程度理解できるだけでなく、民具研究はそのまま庶民の生活文化における最も基本的な物質に関する研究になるのである。言い換えれば、民具は「伝統」でもあり、現代社会における持続的発展を続ける資源及び庶民の経験と知恵の「物証」でもあるのである。

-
- 1 筆者はかつて中国の同学の注意を喚起するため、日本の民具研究の歴史、理論、方法を体系的に中国の民俗学界に紹介した。周星『日本民具研究の理論和方法』2000年3月参照。
 - 2 「研究所国学門風俗調査会開会記事」、『歌謡週刊』第58期、1924年6月8日
 - 3 この方面の代表的成果として主に以下のものがある。
 - ・中国美術全集纂編委員会編『中国美術全集 11 工芸美術編 竹木牙角器』文物出版社、1987年
 - ・『中国美術全集 12 工芸美術編 民間玩具剪紙皮影』人民美術出版社、1988年
 - ・王朝聞編『中国民間美術全集』華一書局の中の
 - －『中国民間美術全集 (2) 祭祀編 供品巻』1994年
 - －『中国民間美術全集 (4) 起居編 陳設類』1994年
 - －『中国民間美術全集 (7) 器用編 用品巻』1994年
 - －『中国民間美術全集 (8) 器用編 工具巻』1994年
 - －『中国民間美術全集 (13) 遊芸編 玩具類』1993年
 - 4 『中国大百科全書・文物博物館巻』588 p、中国大百科全書、1993年
 - 5 1996年に中国民俗学会が民俗博物館専門委員会を設立。『中国民族民俗文物辞典』収録の「中国民族民俗類博物館一覧表」（この一覧表には個人のコレクションを基にした個人博物館は含まれていない）を参照
 - 6 銭民権『上海郷村民俗用品集萃』上海人民出版社、2000年9月
 - 7 宋兆麟『民俗文物通論』紫禁城出版社、2000年11月；宋兆麟「關注物質民俗研究」『中国民俗学会成立20周年学術検討会論文集』2003年11月
 - 8 尹紹亭『雲南物質文化・農耕巻（上、下）』雲南教育出版社、1996年；羅鈺『雲南物質文化・採集漁獵巻』雲南教育出版社、1996年
 - 9 金熙、陸志明「蘇州稻作木製農具及俗事考」『民俗研究』1993年第3期
 - 10 方李莉『伝統与変遷 - 景德鎮新旧民窯業の田野考察』江西人民出版社、2000年10月
 - 11 葉大兵、銭金波編『中国鞋履文化辞典』上海三聯書店、2001年10月
 - 12 筆者手元の資料から列举すると以下のものがある。
 - 宋樹友編『中華農器図譜』第一巻、中国農業出版社、2001年12月；雷于新、肖克之編『中国農業博物館館蔵中国伝統農具』

- 中国農業出版社、2002年9月；劉雲編『中国箸文化大観』科学出版社、1996年8月
- 13 宋兆麟、高可編『中国民族民俗文物辞典』山西人民出版社、2004年9月
- 14 宮本馨太郎『図録・民具入門事典』柏書房、1991年2月；日本民具学会編『日本民具辞典』行政出版、1997年5月；小川直之等、
関東民具研究会編著『多摩民具事典』樺樹出版、1997年10月
- 15 現代地域社会の教育と総合学習における民具の活用例については、『民間文化論壇』2005年第2期所載の佐野賢治「地域社会と民俗学」（何彬訳）が参考になる。
- 16 岩井宏実、河岡武春、木下忠編『民具研究ハンドブック』（日本語）296～310 p、雄山閣、1985年11月
- 17 渡部武、渡部順子『西南中国伝統生産工具図録』（日本語）、慶友社、2000年；山内智恵美『20世紀漢族服飾文化研究』西北大学出版社、2001年8月